

# 西国街道郡山宿の景観の現状と変化

神鋼電機株式会社 池田尚基  
大阪産業大学人間環境学部 金澤成保

## 1. 研究目的

江戸時代以前、西国諸国から京都へと続く街道として重要な役割を持っていた西国街道。かつてはかなりの交通量を誇った街道であるが、近代に入り交通機関の発達や、産業の変化に伴い現在ではその姿を変えてしまっている。その西国街道のほぼ真ん中に位置する郡山宿（現在の大阪府茨木市宿川原町）もかつては宿場町として栄えたが、街道と同じく現在ではその姿を変えてしまっている。

本研究では、この郡山宿を形成していた東町・西町・道祖本（さいのもと）町のうち、宿場町の中心をなした東町と西町を取り上げ、その景観の現状の記録と過去からの変化の把握を行うこととする。

## 2. 研究方法

かつて郡山宿を形成していた東町・西町・道祖本町という3つの町のうち、宿場町の中心をなした東町・西町の2つの町において、

- ・ 文献調査
- ・ ヒアリング調査
- ・ エレメント調査
- ・ 範囲内の景観要素分布図の作成

を行う。

この調査で道祖本町を取り上げなかった理由は、

- (1) 宿川原の大部分の機能を東町・西町が占めており、多くの資料にも「宿川原は東町と西町に分かれていた」とだけ記載されていたため。
- (2) 道祖本町が東町・西町から少し離れたところに存在しているため。
- (3) 調査範囲として、道祖本町を含めると調査対象が広大になってしまい、調査期間では一定の内容のものが作れなくなってしまう恐れがあるため。

以上の3点である。

また、文献調査は文献での調査地域の歴史・概要の把握をする文献調査1と、過去から現在にかけての宿場の変化を把握するための資料集めである文献調査2の2つに分けて行った。

調査期間：2007年9月20日～12月20日

## 3. 各種調査

### 1) 調査の流れ

本研究では「宿場町の現状の把握」「宿場町の現状の記録」「宿場町の過去からの変化」3つに分け調査を進めていった。

まず、文献調査1で調査地域の歴史・概要の把握を行い、次に宿場の現状の記録として、建築物の特徴や歴史についてインタビューを行うヒアリング調査、対象建築物の景観を形成するエレメントを記録、図にまとめるエレメント調

査も同時に行った。次に景観要素分布図の作成では、調査対象を点から面にし、調査範囲全体のエレメントを図にまとめた。次に、過去からの変化の把握として文献調査2を行った。文献調査2では過去の宿場町の資料を集め、ヒアリング調査やエレメント調査などから得られた宿場の現状との比較を行った。

### 2) 現状の把握（文献調査1）

文献調査1では、調査範囲である郡山宿（東町・西町）を含む、“郡山宿全体の概要を把握すること”を目的として西国街道の概要・歴史、そして郡山宿の概要・様子を調査した。西国街道については、現在では寂れてしまっているものの、江戸時代以前では、国の整備した街道として、参勤交代の大名や旅人の通行路、また、陸運の要路として重要な役割を果たしていたことが分かった。また、その呼び名においても、中世の山陽道から、西国街道と呼ばれるようになり、江戸時代には山崎道と公称されるようになるが、通称として、現在でも西国街道と呼ばれていることを知ることができた。

次に、郡山宿については、宿場が出現したのは江戸時代で、幕府によって参勤交代の大名や旅人のために作られているということがわかった。また、人口、家の軒数などは他の宿場に比べ小規模な宿場であったが、その反面、旅籠の数などは6つある宿場の中でもトップクラスで、大名行列などの際には町全体で宿場を営んでいたことが分かった。小さいながらも活気のある宿場として、街道上の重要な役割を果たしていたようだ。

### 3) 現状の記録

#### (I) ヒアリング調査

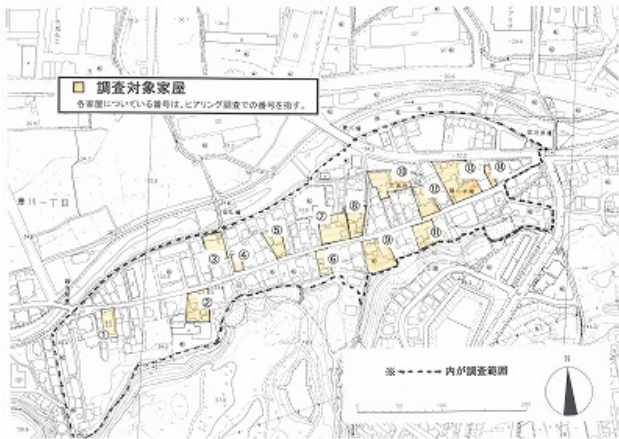
ヒアリング調査では、調査範囲内にある約185件の住宅、施設のうち（H17年度住宅地図で確認）、建築年代が戦前（昭和初期）以前と思われる伝統的建築物、もしくは、近代的ながらも、和風建築の様子を色濃くしている建物を対象として、その建築物の歴史や、現状、家主の意識調査、そして伝統的要素の有無を知るためのインタビューを行った。調査対象として取り上げた建物は21軒であったが、ヒアリング結果が得られたのは、そのうち14件であった。

ヒアリング項目

- ① 昔からこの地に住んでいる方かどうか？
- ② 元々、何年ごろに建設された建築物なのか？
- ③ 増・改築はされたか？されたならばそれはいつごろか？
- ④ 施工者・設計者は誰か？
- ⑤ 古い建物ならば、かつての建築物の名残は残っているか？ それならば、なぜ昔の建築物を残しているのか？

また、今後残していきたいかどうか。(特別、意識しているかどうか)

⑥ 古い建物の良いところは？



(図一) 調査対象家屋

- ⑦ 古い建物の不便なところは？
- ⑧ 昔はどんな人が住んでいたのか？(商人 or 農民など)
- ⑨ 屋根の形状は変えられたかどうか。
- ⑩ 昔、立て格子など伝統的要素はあったか、もしくは昔からそうだったのかどうか(後からつけたのか)。
- ⑪ 玄関は増築したものかどうか。
- ⑫ 昔、土間はあったかどうか。

この調査では“建築年代が戦前の建築物”及び“伝統的な様相が強く出ている建築物”を調査対象として取り上げた。調査建物は21軒であったが、結果が得られたのは、そのうち14件であった。結果、調査をすることの出来た14件のうち、建築年代が戦前のは、10件(うち社寺建築1件)であった。調査範囲内の建物、約185件の中で、伝統的建築物が10件しか残っていないということから、かつての建築物がほとんど失われていることを知ることが出来た。しかし、対象建築の歴史・特徴的エレメントの把握においては、特に伝統的建築物において、現在の建物には無い歴史や、エレメントを見ることができ、数は少ないながらも今後もぜひ残していくべきだと感じることが出来た。また、この調査の中では、“現在の景観の記録”以外にも、建物の家主さんに対して“今後その建物を残していくかどうか”といった質問で建物に対しての意識調査を行ったが、この結果は上記した私の気持ちとは裏腹に、明確にYESの回答をしたのは、伝統的建築物10件中、5件という結果であった。しかも、その5件においても、後継者難などは色濃いらしく、今後、景観がさらに変わっていく可能性が高いということが分かった。

さらに伝統的建築物においては、その多くは増改築を行い内部は大きく様子が変わってしまっており、上記した5件以外の中には老朽化のため「出来れば建て直したい」いわれている家屋もあった。その理由はやはり“住みにくい” “維持費が非常に高い”といったものであった。こ

れらの問題は郡山宿に限らず、様々な伝統的建物で見られていると思われ、この問題を解決しない限り、景観が時代に流されていってしまう現状を変えることは出来ないであろう。これらの問題を解決するには、やはり市政の保護が必要なのだろうが、そう簡単に解決するわけではないようで、実際に史跡指定を受けているNo.13の建物では、「一般公開や、過去どおりの復元のため家主の自由が無い」といった苦勞の声を聞くことができた。同じくかつて史跡指定の話があったという建物においても、同じ声を聞くことができ(この2軒は断っているが)、住む側から見れば、市政の保護は非常にリスクの高い行為であることが伺えた。この意識調査の結果から、見る側と住む側の観点は異なっているということをつくづく実感することも出来た。

## (II) エレメント調査

ヒアリング調査では、インタビューほかに特徴付けるエレメントの紹介なども行った。ここではよりわかりやすくするために、その建築物の持つ伝統的要素、景観要素、環境要素を項目別に分け、一覧表の作成を行った(表一)。項目については、調査対象内で最低1つは確認されたものを項目として設けており、一つも確認できなかったものは項目として取り上げていない。図一の調査対象家屋の図とこの2枚を見比べることにより、わかりやすく建築物の特徴をつかめるはずである。また、この調査により、かつて郡山宿に建っていた建物の特徴を推測することが出来た。

まず、調査家屋図を見ると、伝統的建築物が街道に沿って建っていることが分かる。また、建築物の建築様式にしても、伝統的建築物のうち、その建築年代が明治時代以前の建物は、どの建築物も町屋型建築をしている。このことから、かつて宿場の建物がすべて街道沿いに建っており、その後ろはすぐ畑や竹やぶであったという特徴を見ることが出来る。また、エレメント一覧表から、伝統的建築物全体には、瓦屋根、中二階建て、漆喰壁、腰壁といった要素が多く見られ、その中でも建築年代が明治以前の建物では、越屋根、虫籠窓、土間、格子戸・面格子といった要素が多く見られることが分かった。

## (III) 景観要素分布図の作成

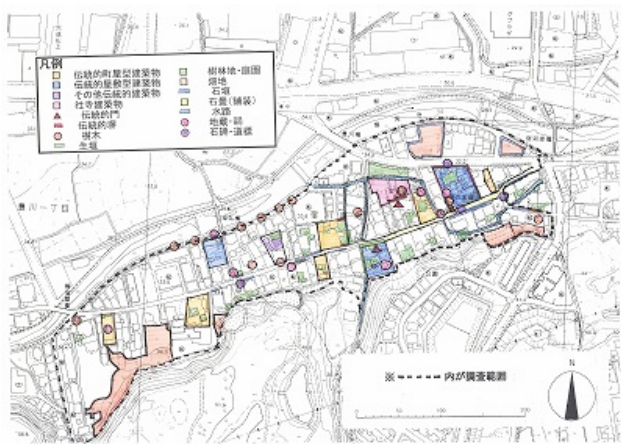
前項まででは、各建物の持つ伝統的要素、景観要素、環境要素の抽出と整理を行ったが、この項では調査範囲全体の伝統的要素、環境要素の調査を行い、地図に落とし込むという作業を行った。この地図の作成によって、調査範囲においてどれだけの伝統的要素が残存しているのかと言うことが分かりやすくなるはずである。

前項までで、記述することの無かった道路上にある道標や、地蔵を“その他エレメント”として解説し、その上で地図の作成を行うこととする。また、分布図の作成に当たっては、本来ならば景観要素として和風建築物や和風工作物を入れるべきなのだが、“和風”という認識には個人差があり、あまりにも曖昧になってしまうため、分布図の

作成においては建築年代が戦前である、伝統的要素を持つ 建築物や工作物のみを要素として取り上げることとした。

Table with columns: No., Building Style, Landscape Elements (Roof, Wall, Window, Entrance), Traditional Craftsmanship, Environment. Rows 1-13 show presence/absence of elements like traditional townhouse type, religious buildings, tiled roofs, etc.

(表-1) エレメント一覧表



(図-2) 景観要素分布図

結果としては、やはりヒアリング・エレメント調査で述べたように、ほとんど伝統的要素は残されておらず、中でも、伝統的作物物に関してはほとんど残っていないとい

4) 過去との比較 (文献調査 2)

まずこの項では過去の写真から、景観の変化を把握した。写真-1は明治36年の東町での祭りの様子を写した写真で、写真-2は現在の東町の写真である。



(写真-1)

(写真-2)



(写真-3)

(写真-4)

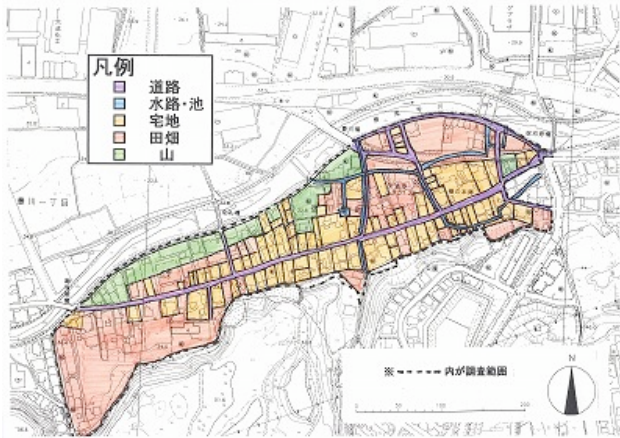
同様に、写真-3は明治30年ころの宿場町に架かる橋の写真で、写真-4は現在の写真である。

堤防の高さや、橋の素材が違うこともさることながら、何よりも遠くに見える背景が大きく変化していることがわかる。結果、町並みや建物はもちろん、川の堤防や道の舗装、幅などの様子も大きく変わっており、大部分の景観が変化してしまっていることがわかった。

次に、過去の資料、主に地図をもとに、現在とどのよう



化していることがわかった。特に変化が多かったのは宅地の変化で、現在では調査範囲のほとんどが宅地になってい



(図-3) 地籍回復元図

るが宿場だったころには、沿道に家屋が立ち並んでいるだけで、それ以外は山や竹藪、田畑などが占めていたということだろう。

さらに、昭和初期までは西町は現在の半分ほどしかなく、現在家屋が建っているところの多くは畑であった。このことから宿場町だったころは、現在に比べ、かなり家屋が少なかったことがわかる。他に、町を囲む山や川においても、現在ではその姿をだいぶと変えてしまっているようで、かつての様子はもう見られないようであった。

#### 4. 調査結果のまとめ

各調査の結果、調査建物の現状の記録と同時に、かつての郡山宿では今ほど家屋がたっていなかったことや、宿場全体にもっと田畑が多かったことなど、昔の宿場の様子を知ることができた。しかし、伝統的な建築物や工作物はそのほとんど失われており、さらに伝統的な建築物や工作物の所有者も、後継者難や建物の老朽化、そして維持費の問題などにぶつかっていることがわかった。ここから何らかの手を打たない限り、今後さらにかつての宿場町の景観は失われていくということが分かった。

結果としては、江戸時代の宿場町の様子はほとんど残っておらず、数軒の建物が残っているだけであった。また、過去の資料と現在を比べると、宿場以外に、宿場を取り巻く田畑や、山、川などの自然環境も、大きくその姿を変えてしており、このことも、宿場の変化に大きく関係していたと考えられた。また、かつての建築物はどのような要素をもっていたかについてはエレメント調査の結果から、以下のような要素を持つ建物が多かったと予想された。

- ① 町屋型
- ② 瓦屋根
- ③ 越屋根
- ④ 中二階建て
- ⑤ 漆喰壁
- ⑥ 虫籠窓
- ⑦ 土間

⑧ 腰壁

⑨ 格子戸・面格子

調査範囲内の実例で挙げるならば(写真-5)の建物が代表例として挙げられるだろう。また(写真-6)のような藁葺き屋根(現在はトタン)の家もあることから、上記した要素を持つ建物と、藁葺き屋根の建物との2種類の建物が、街道沿いに軒を連ねていたのだろうということがわかった。



(写真-5)



(写真-6)

#### 5. 考察

前項で記述したような要素を持つ民家を復元・補修していくこと、現在ある古い建物を残していくことなどで、かつての景観を復元していくことは可能であろう。しかし、ヒアリング調査の中では、住民の方々から「今更(景観保全を)やってもしかたがない」という生の声が多く聞くことができた。このことから、現在のままではさらに景観は失われていくだろうと予想することができた。単純に景観を保全する活動だけではなく、かつての日本の景観の美しさ、そしてそれが失われつつあるという現実を伝える教育など、そういった小さな活動がかつての日本の街並みを取り戻す唯一の道であると思う。町並みは一人では作ることができないものである。一人一人が、どういった思いを持つかどうかで、その景観は大きく変わっていくものだろう。

#### 参考資料

- 1) 茨木市教育委員会(1992)「わがまち茨木―街道編―」、p54~59 茨木市教育委員会
- 2) 箕面市立郷土資料館(2006)「西国街道の道標展」、p3、4 箕面市立郷土資料館
- 3) 西田 善一/監修(2005)「茨木・高槻今昔写真帳」、p104、124 郷土出版社
- 4) 岡市 正/[ほか]編集(1995)「目で見る茨木・高槻の100年」、p22、33、35、郷土出版社
- 5) 笹川 隆平・石川 道子・梶 洸 共著(1986)「椿の御本陣」、p20~43、向陽書房
- 6) 茨木市教育委員会(2001)「郡山宿本陣」、p1~7、23~26 茨木市教育委員会
- 7) 東京美術(1978)「山崎道分間延絵図 第一巻」解説編、p33~35、東京美術
- 8) 山本良介(1999)「京都一建築と街並みの<遺伝子>」、p140~141 建築資料研究社
- 9) 日本建築学会(2004)「町並み保全型まちづくり」。p40~47 丸善株式会社